

大陸(満州)

ノモンハン戦 照空隊員

岩手県 谷川源一

私は大正七(一九一八)年一月二十九日、岩手県上閉伊郡遠野町(現遠野市)で生まれました。昭和十二(一九三七)年徴集の徴兵検査を受け甲種合格でした。十六年徴集者からは確か第一乙種も現役兵として入営したのですが、わたしの時は正規の甲種でないと現役入営はなく、皆体格の良い人達だけでした。入隊は高射砲第十連隊第三中队でした。その日は昭和十四年三月四日でした。

「手帳No.1」には十四年三月十二日より日記式

に記されていて、その前の数頁には三十年式銃剣の略図、部位の名称、その他入営時に渡された兵器、その他、軍人の基礎知識等が記入されていました。

軍隊に関しては学校で軍事教練も受け、真面目に勉強をしていて一応の知識と覚悟はしておりました。また体力も柔道は有段者でもあり、大概の訓練には耐え得るとひそかに思っておりました。教育中、幹部候補生試験を受けるよう、教官や上司から強く言われておりましたが、私は長男であり、家を継ぐという責務があつたので、お断りを続けてまいりました。

高射砲隊というのは、一般歩兵とは全然異なつた教育で、特に私は照空燈、聴音機等の防空関係

機器の操作や、電気関係、機械の構造など、小銃や、機関銃を扱う兵種とは違った、機械工学、光学、聴音など今までには縁のない勉強と演習の連続でした。

一期の教育が終了して間もなく、七月十六日は、関東軍の「作戦命令第六七号」により応急派兵となりました。同十七日は、関東軍第一野戦照空隊に編入、牡丹江に向かい公主嶺を出発。同十九日、牡丹江着、牡丹江要地防空隊となりました。これは軍隊手帳の履歴の記事です。

その時、私の日記には、

七月十七日（月）曇後晴。午前四時、非常呼集、続いて軍装を整えて待機、機械を準備して貨車に積み込む。十三時頃、公主嶺街にさらばす（出発）。

七月十八日、晴、一日中車中に過ごす。

同十九日、晴、五時三十分、牡丹江に到着、機材車下車、晩は小学校講堂に舎営。

同二十日、晴、舎営地を後に一路陣地に向かい

進入、晩は衛兵勤務。

同二十一日、晴、初めての露営、蚊の多いのに閉口。本日も敵影を見ず終わる。

同二十四日、晴、掩体壕掘り、第三軍参謀巡察あり。第一動哨、第二動哨の守則を覚える。

八月四日、いよいよ作戦命令（山作命三五号）が発令さる。同二十五日、阿爾山発。

以下日誌により、第一野戦照空隊のノモンハン事件の対空戦闘状況を話します。

八月四日、晴、夕方より急に命令下り、陣地撤去、夜間中に機械を全部貨車に積む。同月五日、朝出発、終日車中。同月六日、零時ハルピン通過、終日車中。

七日、七時十五分、ハローアルシャン到着、機材を下し陣地進入。敵機の爆音を聞く、夜中照空燈の発電車を山上に引き上げる。

八日、射光機を山に引上ぐ。一時整置、夜中掩体を掘る。

九日、敵機来襲、昼夜通して掩体及び防空壕を掘る。

十日、午後数十機の敵機来襲、初めて直接敵影を見る。高射砲隊の努力により七機射ち墜す。敵戦闘機の地上掃射を受けるも味方に損害なし。夜防空壕を掘る。

十一日、午前、午後共三機の敵戦闘機を見る。我が陣地無事なるも、味方の高射砲弾当たらず。夜はやはり防空壕掘り。

十二日、午前中、敵T B型重爆機を見る。

十三日(日)曇後雨、本日は午前、午後敵影無し、日曜日故、敵も休みか。

十四日(雨止まず)、何もかもジメジメとしており嫌な気持ちであるが、敵影を見ず。

十五日、十六日、敵機来たらず、午前中对空監視。

十八日、午前中、山へ木を伐り、運搬には些か参った。午後一時、久しぶりに敵機姿を見せる。

機種T B型重爆機、航速の大なるのに驚く。

十九日、ハンタガヤ迄敵機三十機来襲の報に接したが、我が陣地ではかすかに爆音聴くも敵影を見ず。

二十日、午後一時頃、数十機の敵戦闘機来襲す。先日とは些か違った戦法にて我が高射砲陣地に地上掃射を浴びせるも、我軍びくともせず八機を射墜す。その後敵爆撃機十七機の編隊で我が陣地頭上を通過し、爆弾を投下するも我軍に損害なし。夕刻より掩体・防空壕を掘る。

二十一日(晴)、九時頃、敵二機の編隊を見る。十一時頃、三機編隊敵機来襲し爆弾投下する。十二時半頃、十五機爆弾投下。十九時頃、九機編隊にて来襲、アルシャン付近に数個の爆弾投下したが、いずれも損害なし。但し、投下技術が巧くなって来たことに驚く。本日の襲来機はいずれも爆撃機にて高度六千メートル以上。

二十二日、午前七時頃、二機編隊敵爆撃機を見るも東方より西方に飛来、その他異常なし、高度六千メートル。対空監視、夜防空壕掘り。

二十三日、敵影を見ず。

二十四日、十六時半、二十機編隊の爆撃機来襲、数個の爆弾投下し、悠々と去る。我が方の被害甚大らしい。高度六千メートルより、変なビラを投下（謀略用？）。十九時頃、四機編隊の敵機来襲し、高度七千より爆弾投下。急降下爆撃を受ける。夜間防空壕掘り。

二十五日、敵影見ず。夜間防空壕掘り。

二十六日（土）晴後風強く小雨、午後四時頃、敵爆撃機一機見るも他異常なし。

二十七日、雨後晴・雷雨、爆音聴くの報あるも敵機影見ず。午後六時、友軍機九機飛来せりの情報聞く。

二十八日、爆音聴くも機影見ず。

二十九日、午前九機、午後十機編隊の友軍機を見る。夜間防空壕屋根作り。

三十日、本日はずっと友軍機のみ飛ぶ。

三十一日、昨日同様友軍機のみ、午前、機械運搬、晩、防空壕屋根作り。

九月一日、三十二機編隊友軍機を見る。

二日、我陣地上に十一機編隊の友軍機数回往復す。午後二時頃、ハンダガヤ上空において数機の爆撃機・戦闘機、我が陣地を攻撃するを見る。友軍機一機、応援を呼びに戻るも、応援機飛来の頃は既に敵影なし。夜間防空壕屋根作り大体終了。

三日、五時、聴測を主とする訓練概ね一時間、十時より、十機編隊友軍機、午後六時頃、九機編隊の友軍機を見る。

四日、朝、八機編隊友軍機ハンダガヤ上空に向かい飛来、続いて敵戦闘機九機暫くぶりに姿を見せる。その後数回友軍機我が陣地上空を飛ぶ。昼頃友軍機一機故障のため阿爾山司令部付近に不時着し、機体大破するを見る。

五日、友軍機及敵機数機の編隊を見る。午後八時四十五分より十時迄、照空燈射光訓練を実施（訓練は戦闘期間でも実施）。

六日、午前五時より一時間演習実施。本日は友

軍機のみ飛行す。

七日、本日天気不良のため爆音らしきもの聴こえたのみ他異常なし。

八日、友軍機の爆音も聴いたのみ。

九日、午前中、友軍機三機編隊を三度ばかり見る。昼、父上より二通の手紙を受け、中にお守り入れてあり。何か小包を送られたとの報に接するも、それから「幹部候補生の件如何になった」との文あり、胸に五寸釘を持ち込まれた感じ、残念でならぬ（幹部受験断念、上官のすすめと、家庭との板挟み）。

十日、午前中、昨晚に続き父上に手紙を書いたが、再び途中にて止めた。幹部の事考えると何か気が引ける。本日は猛烈な吹雪となる。

十四日、呆れた天気、晴れたと思うと降り、降ったら晴。午前中晴れ間に久しぶりに敵影を見る。しかし、何もせず終わる。九月一日上等兵進級。

十五日、終日天気良し、午前、午後を通じ数機

の友軍機飛来。

十八日、夕刻より雷物凄く鳴る「一天俄かにかき曇り雹が降り出し、金色の鴉飛来し、神武天皇の弓の先に止まる」との小学校の教科書にある。

この戦闘勝利疑いなし。神は正義に味方をする。

十九日、日ソ停戦条約締結の報を聞く。

二十三日、聞くところによると、近いうちに転換あるとのこと。寄ると触ると種々の噂飛ぶ。

「公主嶺へ帰る」「ノモンハンへ行く」「ハンダガヤに行く」「ハイラルへ行く」「牡丹江に帰る」。

教育演習が無いので直ぐ陣地へ帰り、装具全部を纏め、軍装検査、機材整備をし、いつ撤去命令出ても出発できるよう用意をした。

しかし、今迄働いたことが無駄になったと思うと本当に残念である。本日父上より御手紙同封の伊勢神宮両社のお守を戴く。

二十四日、六時半起床、機材点検、阿爾山防衛最後の監視哨に立つ。昼食後機材撤去、照射班の用事は本日で終わる。晩は初めて穴蔵の中で寝

る。非常に寒かった。

二十五日、帰營裝備、十四時、機材阿爾山駅ホームに集結。十九時、機材積載終了、十九時二十分、阿爾山駅発「誠に残念であり、又思ひ出深い生活があり、且つ愉快な一日、一日であった」ノモンハン事変の戦闘は酷しかったが、部隊将兵の意気は軒昂であった。

私たちは、いよいよノモンハン戦線の陣地を離れ原駐地へと向かいました。その時の日歴を簡単に申し述べましょう。

九月二十六日、十時二十分、白城子にて朝食、昼食給与、一日中車中、気候は非常に暑く、冬の国から夏の国に来たようである。

二十七日、夜間、非常に寒かったが、昨晚に比べるとずっと暖かい。十一時半、四平街着、十六時半、公主嶺着、機材下車終わり、久しぶり懐かしの原隊の土を踏む。「公主嶺よさらば」から五度目の入浴、戦塵を落とす。しかしまた何とな

く、苦労を重ねたこの戦塵を落すのが名残り惜しい気もする。

二十八日、兵舎の寝台藁布団、二カ月ぶりにて原隊の夢の園、気持良くぐっすり眠る。

十月十日、山岡部隊創設記念、帰還会、そして戦没者慰霊祭。

ノモンハン事件については沢山の資料、手記・戦史が発刊されておりますが、私の日歴ともいうものも、ノモンハン戦に参戦しつつ、照空隊という立場で、彼我の航空機飛来の状況、日時、機数等がある面では客観的に記述してありますが、地上戦、航空戦、補給戦等、緒戦から停戦までにはいろいろな変化があったと思われま

す。兵力、兵器、物量の圧倒的な強さに惨敗したともいいますし、航空戦は我軍が勝ったとか、また独ソ戦が勃発しなければ、日ソ全面戦争になつたら関東軍は、日本軍はどのように戦い、どのような結末がついたのかは知るよしありません。

しかし結果的には、この二カ月間に彼ら多くの犠牲者ができ、特に日本軍には戦没以外の俘虜という悲劇がありました。この事件を、私の手帳日記を基礎とし申し述べましたが、貴重な体験を、もう少し話をしたいと思います。

ノモンハンの高射砲隊は最前線で、我々照空隊は興安嶺の麓に陣地設定をして、小高い山から戦況を見ていました。高射砲は対空射撃ばかりでなく、戦車の来襲に対し、速射砲では口径が小さく破壊できぬので、高射砲を水平にして射撃をして、戦車砲として威力を発揮したこともありました。

我軍の戦闘機は九七式でしたが、小廻りのきく九五式練習用戦闘機も使っていました。ソ連の飛行機双発の軽爆撃機は、速度が速く、音がしたと思ふと、もう上空へ来る。我々のそばに爆弾を落とし高速で飛び去る。また夜間爆撃は駅前にもありました。

ノモンハン戦で停戦後、ソ連軍の俘虜は随分帰したが、日本軍は恥だからといって帰れなかつたと聞いております。戦後、ソ連へ抑留され強制労働させられた我が軍の軍人が、シベリアで、ノモンハンの俘虜だった人と会ったなどということも聞きましたが、捕虜になるなら死をとという当時の軍隊教育でしたから、そのような人もおつたでしょう。

なお、日誌には書いていない我々照空隊のことについてちょっと申しましよう。牡丹江から現地までは列車でしたが、小隊長は既に陣地へ先行して行きました。私は幹部候補生と一緒に山の方へ歩いていきました。発電車というトラックのような車から電線を引いて照空燈を一〇〇メートル間隔に設置する。これを自動操縦する機械もあるが、手動のはハンドルが重くて操作しにくかつたのです。演習の時はほとんど手動でした。

聴音機からは計算班が、飛行機の高度、速度、方向を算出するのですが、実際には照空燈をカン

で動かしていました。有線通信ですが命令が遅いからです。

一個小隊には三燈、その間は三〇〇メートル位、光の強さは同じだが、広範にわたり照らし、目標がはっきりしたら、三方から縮める。三点を一致させるのです。満州で航空隊との合同演習の時、戦闘機が中に入ってしまった、墜落しそうになり、光を消したこともありました。

ノモンハン復員以降については満州での警備・教育です。復員（動員解除）業務は十月十日に完結。二十日、牡丹江移駐のため公主嶺発、二十七日、牡丹江着、新兵舎に落ち着き以後同地駐留、警備の任につく。軍隊手帳によりますと、昭和十四年九月二十六日より十月二十日、吉林省有懐県、十月二十三日より、牡丹江省寧安県で外国鎮戍従事とあります。

その後、昭和十五年二月ガ瓦斯兵を命ぜられ、四月二十九日、支那事変の功により勲八等瑞宝章及支那事変従軍記章を授賜されました。昭和十六年

七月十日、高射砲一〇作命甲第五号により牡丹江要地防空に従事、二十九日動員編成により照空第一中隊に編入し、八月二日動員完結。

さらに満州で勤務して、昭和十七年四月二十三日、中部第七十二部隊に転属、二十九日字品上陸、五月三日現役満期除隊となりました。

家に帰ってからですが、青年学校で銃剣術の教育中、相手の木銃の先端のタンポが私の防具の胴の下へ入り、炎傷をおこしていましたが、その前に父は病没しました。

弟は予備士官学校を卒業見習士官になっていました。任官し神戸の鷹島山で機関砲隊長をしていましたが入院していたのです。私が第二回の釜石艦砲射撃（連合軍海軍）の跡始末をしていた時、終戦の直前に死亡したとの知らせが実家にありました。

部隊葬を行うので「遺族の御出席」をとの案内状が参りました。しかし、その時は広島へ原爆が

投下された時です。岩手を発ったが列車がどうなっているのか判らない。神戸へ着いたが焼野原、しかも終戦と重なりましたので、どこへ行ってよいか判らない。やっと憲兵隊で聞きましたが、もう部隊葬は終わっておりました。

部隊長にお会いをし、いろいろお世話をして頂き、遺骨を抱き、軍刀と軍服は持って帰りましたが、遺品は自宅へ送ってもらいました。母は私が生きていてくれた代わりに、弟が死んでくれたと言っております。

想えば現役中の、十六年夏、所謂関特演があり、全国に大動員があり満州の我々の部隊も動員下令、対ソ戦近しの感をひしひしと感じ、私の勤務、事務も繁忙を極めました。そのため、従軍手帳に日記を書く暇も余り無かったように記憶しております。

七月十日、本日より牡丹江市の防衛演習、連日の雨天が何やら終末に近づいたらしい。昼過ぎ一

時頃陣地に到着早速仮の戦闘準備完了、連隊外の満軍も出動参加せり、満軍の偽装上手なり。十一日、聞くところによると防衛演習を含む待機姿勢らしい。目標はソ連機……の記述がある。今見ても何か、関特演を感じさせます。

日記は昭和十六年十二月三十一日を以て終了し、以後空白になっています。

【解説】

ノモンハン戦 照空隊員

聴取証言者・谷川源一氏は照空隊出身であり、入営以来、詳細な日誌と教育、資料の軍隊勤務状況など、後世に残す貴重な記録などを保管されてある。

照空・聴音で防空任務を果たす為には対空監視は重要である。その準拠すべき事項を記す。

昭和十四年六月、部隊ノ教育時、筆記サレタ駐軍間ニ於ケル対空監視哨ノ一般守則

- 1 対空監視哨ハ常ニ四周ノ上空ヲ監視シ又ハ音響ニ注意シ、若シ飛行機、気球等ヲ発見セバ監視ヲ中絶スルコトナク直チニ状況ヲ指揮官ニ報告スベシ
 - 2 発見シタル飛行機敵ノモノナルカ或ハ疑ワシキモノニシテ我ニ近接シ来ルトキハ直チニ示サレタル防空部隊ニ通報スベシ
 - 3 飛行機全ク我が視界ヲ去ラバ之ヲ指揮官ニ報告スベシ
 - 4 其ノ他概ネ歩哨ノ動作ニ準ス
- 特別守則
- 1 監視哨ノ名称
 - 2 彼我飛行機ノ識別法
 - 3 必要ナル道路、地点ノ名称
 - 4 要スレバ特ニ監視スベキ方向
 - 5 連絡スベキ防空部隊ノ位置
 - 6 報告又ハ通報ノ手段

私の軍隊生活（その二）

愛知県 河村 廣康

編上靴へんじょうか

編み上げ靴のことを軍隊では「へんじょうか」といいます。編上靴の手入れで春夏秋冬はさほどではありませんが、冬は本当に泣かされます。零下三〇度以下にもなる兵舎の外で手入れをしなければなりません。

ご承知かと思いますが、靴底には滑らないように鉄の鋌が沢山打ち付けてあります。冬ともなりますと鋌と鋌との間に雪と泥が詰まり、それがカンカンに凍ってちつとやそつとではとれません。それを取り除くのに竹を尖らせた「竹へら」で取れということです。しかし竹へらではとても取れるものではありません。そこでナイフでつついて取り除くのです。そこを見つかりますと、「こ